

# 他者を想うことで自己を知る

## 多文化・異文化理解教育の実践

草薙 優加

### はじめに

不透明な時代を生きる人々が幸せな人生を送るために何を学ぶ必要があるのかという観点から、OECD (2005) は獲得すべきキー・コンピテンシーを提言した。ここで注目すべき点は、従来の教育観からの転換、つまり単なる教科の知識や技能を超えた能力の獲得を推奨した点である。本提言は日本の教育界にも大きな影響を与え、学習指導要領の「生きる力」(文部科学省, 2008)や高等教育の教養教育理念と教育観(日本学術会議, 2010)に波及した。OECD のキー・コンピテンシーの 1 つに、「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」がある。キー・コンピテンシーが提言された 2005 年以降、残念ながら、今私たちが生きる世界はより深刻さを増しており、各人がこのコンピテンシーを有し行動できるか否かが世界情勢をも左右する切実な状況へと変化している。

外国語教育にあっても言語と技能のみの学習にとどまらない実践が求められ、外国語(英語)の学習指導要領には異文化理解が学習項目として挙げられている。それに連動し高等教育では、文部科学省が 2019 年に公示した教員養成機関の教職課程再課程認定における外国語(英語)コアカリキュラム「英語科に関する専門的事項」全 14 項目に「異文化コミュニケーション」「異文化交流」を含めている。筆者が勤務する大学でも再課程認定への対応として、担当授業「英語コミュニケーション概論」でこれら 2 つの学習項目を扱うよう授業内容を一新した。異文化コミュニケーション、異文化理解、英語学の理論と、履修者自身がコミュニケーションを行う際の省察に重きを置き、履修者が抽象的思考と具体的思考を行き来しながら学ぶことを目指している。さらに、異文化への造詣が深い人、異文化背景を持つ人を招き、他者から学び、他者に想いを寄せる過程から自分自身を知る道筋をつける。その仕掛けづくりとしてゲストの語りや演劇的手法を用いている。本稿ではこのアプローチによる実践を紹介し、今後、その有用性をどう検証するかを示す。

### 異文化理解教育・異文化交流の実践

先に述べた教職課程再課程認定申請に際し改訂した、筆者担当の該当授業「英語コミュニケーション概論 B (副題: 異文化で学ぶ英語コミュニケーション)」の概要は図表 1 のとおりである。半期 15 回授業では、見える文化と見えない文化、異文化、カルチャーショック、ステレオタイプ、価値観の違い、間の取り方と話し手の交代、集団主義と個人主義、差異を楽しむ、交渉する力、異文化交流等をキーコンセプトとして学習を進めている。

到達目標	中学校および高等学校における外国語科の授業に資する異文化理解の知見を身に付ける。また、異文化背景を持つ人と接する際に、異文化理解の知見を適切に生かすことができるようになることを目標とする。①異文化コミュニケーションの現状と課題を理解する。②多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性と異文化交流の意義を体験から理解し、異文化に対する開かれた姿勢を身に付ける。
目的・内容	グローバル化が進む中、英語母語話者のみならず英語を母語としない多様な言語圏・文化圏の人々と英語を国際共通語として使うことが多い。英語運用能力だけではなく異文化理解を基盤とした異文化コミュニケーション能力を身につけることが求められる。以下の 3 つの観点から異文化を省察的に考える。①異文化コミュニケーションの理論を毎回身近な具体例とアクティビティを用いて学ぶ。②留学経験者から聞き取りを行ない、理論に照らし合せて互いに学びあう。③異文化的背景を持つ市民と交流し、理論を省察的に考える。

図表 1 「英語コミュニケーション概論 B」(授業概要)

異文化交流の機会を持つために、多文化環境で英語を含めた複数言語を使いながら国内外で社会貢献活動を行っている 2~3 名の外部講師を招聘している(図表 2)。彼らの生き方に接して、履修生それぞれが気づきを得てもらうことを主眼に置いている。なお、新型コロナウイルス感染症蔓延のため、留学経験者との交流は 2019 年度のみとなった。同理由で 2020~2021 年度は全てオンライン(同時双方向型・オンデマンド型)で実施したが、2022 年後以降は対面実施に戻り各講師から生の声を聞くことが叶っている。

年度		演 題	講 師
2019	講	「日本語教育から世界が見えるー難民・海外の教育現場での実践を通してー」	内藤 真知子氏 公益財団法人 国際日本語普及協会、RHQ 支援センター 日本語教師
	講	「身近な異文化と自身のアイデンティティ」	長田 恵美氏 ベトナム語通訳・翻訳者
	講	「長期留学経験者から学ぶ」	鶴見大学 長期留学派遣者 2 名
2020	講 オ	「情熱のすべてを捧げて～カンボジア取材の 15 年間～」	高橋 智史氏 フォトジャーナリスト
	講 オ	「元難民として戦争と平和を考えるーカンボジアと日本の体験を振り返って」	住友 正人氏 公益財団法人 アジア福祉教育財団 難民事業本部職員
2021	講 オ	「インド英語と異文化コミュニケーション」	五十嵐 淳子氏 ヒューマングローバルコミュニケーションズ株式会社 講師
	ワ オ	「ダイバーシティと異文化の体感的理解～『アントニーとクレオパトラ』(シェイクスピア作)の世界に遊ぶ～」	オーハシヨースケ氏 演劇教育家・身体詩パフォーマンス
	講 オ	「日本におけるロヒンギャ難民の現状と課題」	カディザ・ベゴム氏 人間の安全保障フォーラム 事務局員
2022	ワ	「異文化ワークショップー二宮尊徳に学ぶ日本人のこころざし」	オーハシヨースケ氏 演劇教育家・身体詩パフォーマンス
	講	「難民の友に、難民と共に～難民を歓迎できる社会に」	漆原 比呂志氏 NPO 法人アルペなんみんセンター 地域連携コーディネーター
	講	「二つの文化を生きる幸せ」	宇野 恵美氏 ベトナム語通訳・翻訳者

図表 2 異文化理解・交流講座／異文化ワークショップ一覧（講：講座、ワ：ワークショップ、オ：オンライン）

紙面に限りがあるため、2022 年度の交流における反応のみを紹介する。異文化に接する際、私たちは否が応でも自分の文化やコミュニケーションのあり方に立ち戻る。留学や仕事で長期に亘り海外に滞在する際、いかに自分の文化を知らないのかを認識したという声を多く聞く。そこで、この年の異文化ワークショップでは、世界各地で様々な年代、社会的立場の人々に公演と応用演劇ワークショップを行ってきた専門家を招き、内村鑑三が英語で出版した『代表的日本人』にあげた一人、二宮尊徳の生き方、その根底にある価値観や彼の並外れた交渉力をテーマとした。二宮を知ることを出発点に自分自身を知る活動である。また、異文化理解・交流講座では、2020 年に開所された滞在型難民支援施設 アルペなんみんセンターの職員、元東インドシナ難民として来日し、その後日本人に帰化したベトナム系日本人通訳・翻訳者を語り部として招いた。

#### 演劇ワークショップへの反応

- 1 人で考え込みながら自己分析すると嫌なことばかりが出てきてしまいがちですが、クラス全員の中における自分を見つめることで、こんな私でも何かしら社会の役に立てるのではと考えることができ勇気をもらいました。また、身体でのコミュニケーションについて考えたことは今までありませんでした。
- 物事に対する考え方を変えることができました。相手の立場に立つことや自己の性質の理解に関する内容が特に学びになったと感じます。

#### ゲストの語りへの反応(滞在型難民支援施設の漆原氏の語りに対して)

- 世界に難民は約 1 億人いるという事に驚いた。漆原さんの施設にはさまざまな国の方が居て、共通言語が必ずあるという訳ではないのにコミュニケーションが取れて心の交流が出来ているのは、難民という立場で互いに支えあっているからなのだと伝わってきた。また異国の地に移動しなければならない状況で、カルチャーショックさえもプラスに捉えて、受入れ国の市民になることや第三国への定住を選択している。今まで、難民の人々はただ困難な生活を送っているのだと思っていたが、実際には自分が想像しているよりも大変なことが彼らに起きていと改めて認識した。

#### ゲストの語りへの反応(元難民の宇野氏の語りに対して)

- 命の危険と共に生きるのは、とても大変で辛い事であることを改めて理解した。もし日本が戦争に巻き込ま

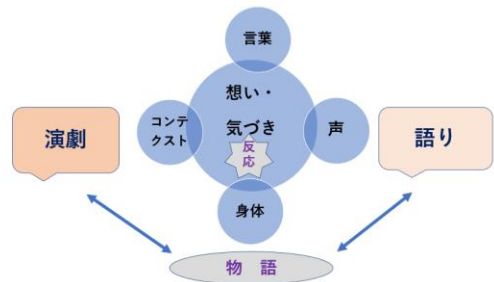
れた時、自分も命の危険に直面し今まで経験したことのない苦しみを味わうのかと考えた。

- 自分の境遇の悪いところだけでなく良いところにも注目し、多面的な考えを持つことが重要だと学びました。普通、難民側の立場であると、追い出されたり、受け入れてもらえない状況に不満を抱くのに対し、宇野さんとは相手方の状況を理解したり、考慮していたことがとても印象に残りました。

## 演劇と語りを用いた教育

演劇あるいは語りでは、声、身体、言葉、コンテクストを介して物語を紡ぎながら思いや気づきを生み出す。演出家の平田(2022)は、演劇的手法を使った教育の最大の目的は他者理解であり、演じることで異なる価値観を持つ人を認め、その他者と何とか折り合いをつける対話力や合意形成能力であるエンパシー能力を育成できると述べている。さらに、演劇的手法によるコミュニケーション教育は文部科学省が提唱する「主体的・対話的で深い学び」を促す効果的なアプローチだと主張する。他者に向き合うことで自分とも向き合う作用があることは、上記コメントが示しているだろう。

語りあるいはナラティブを用いた教育も近年注目を浴びており、特に医療分野への応用が顕著だ。孫(2002)は、エンパシーは人間性の1つであり、それを涵養するのがナラティブ・コンピテンス(共感能力)であり医療教育の要と論じる。この分野では、患者の語りのデータベースが構築され、教育や研究に貢献している。聞き手と異なる価値観や文化的な背景を持った語り手が語りによって物語を紡ぎだすことは、語り手自身にとっても他者に自己を開き・啓きながら対話することで自己をより深く知ることになる。一方、聞き手は話し手の物語に触れながら相手の立場を想うことから、自分の中に生まれる思いに気づくのだろう。



図表3 演劇と語りを用いた多文化・異文化理解教育

## 今後の展望

ことばとコミュニケーションを学ぶには、言語と技能の獲得を目指すだけではない。異なる文化背景の人々と関わることを厭わず、他者の思いに触れ、他者を想う過程から自己を知る経験が必要だ。教室という限られた空間でも演じることを体験し、ゲストの語りに触れることで、より包括的な学びを実現できるだろう。今後、演劇ワークショップと語りのデータベース化、その使用を試み、学習者の反応である学習者の語りをデータに学習者のエンパシー能力形成過程を分析することで、演劇的教育手法や語りの有用性を検証したい。

## 引用文献

平田オリザ (2022) 『ともに生きるための演劇』NHK 出版

文部科学省 (2008) 「学習指導要領『生きる力』」

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/1356249.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1356249.htm) (2023年2月7日アクセス)

文部科学省 (2019) 「外国語(英語)コアカリキュラムについて」

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122_3.pdf) (2023年2月7日アクセス)

日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分科会. (2010). 『日本の展望—学術からの提言 21世紀の教養と教養教育』 <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf> (2023年2月7日アクセス)

孫大輔 (2022) 「患者の語りを用いたプロフェッショナルリズム教育：ナラティブと共感」『薬学教育』第6巻, 1-5. DOI: <https://doi.org/10.24489/jjph.2022-006> (2023年2月12日アクセス)

OECD. (2005). The definition and selection of key competencies: Executive summary.

<http://www.oecd.org/dataoecd/47/61/35070367.pdf> (2023年2月7日アクセス)

## 注

1 本稿は科研費研究課題 基盤研究 (c) 「多文化共生を促す英語ドラマワークショップ手法の確立と普及」(研究課題番号 20K02798) の助成を受けている。

2 著者の教育実践の詳細は、大学文学部英語英米文学科ブログを参照されたい。 <https://tued.weebly.com/>